

## カルヴァンの三位一体神学について

関口 康

わたしも以前から興味を持っていましたが、「カルヴァンの三位一体論」に関する資料は、未だにほとんど全く持っていません。しかし、先ほどからあちこち探しているうちに、ヒントくらいにはなりそうな資料を見つけましたので、謹んでご紹介いたします。

1965年に出版された『カルヴァンを見つめる視点』(Zicht op Calvijn, Christelijk perspectief, Buijten & Schipperheijn - Amsterdam, 1965)というタイトルの小さな本に掲載されている、「カルヴァンの教義学的著作」(Calvijs dogmatisch werk)と題するJ. ファン・ヘンデレン教授(Prof. dr. J. van Genderen)の文章です。同教授は、オランダキリスト改革派教会(CGKN)が経営するアーベルドールンキリスト改革派神学大学で、教義学を教えておられた方です。

「〔カルヴァンの〕キリスト教綱要の神学的構造の意義は、三つの神的位格の固有のみわがが正当に扱われているという、このことである。ひとはカルヴァンについて、次のように語ることはできない。カルヴァンの場合、創造と贖いは〔入れ子式に〕はめこまれている、とか、聖霊とそのみわがの教説はキリスト論の中に詰め込まれている、というように(とカール・バルトの神学が語っているように と語ることは不当ではない)」(同上書、38ページ)。

De betekenis van de theologische structuur van de Institutie is deze, dat het eigen werk van de drie Goddelijke Personen zo tot zijn recht komt. Men kan van Calvijn niet zeggen, dat schepping en verlossing bij hem ineenschuiven of dat de leer van de Heilige Geest en zijn werk ingeklemd is in de christologie. (zoals -- niet ten onrechte -- van de theologie van Karl Barth gezegd is.)

「カルヴァンは聖霊の神学者(B. B. ウォーフィールド)と呼ばれている。カルヴァンの場合、聖霊論が何よりもまず十分に正当に扱われているのである」(同上書、40ページ)。

Calvijn wordt de theoloog van de Heilige Geest genoemd (B. B. Warfield, Calvijn als theoloog en de stand van het Calvinisme in onzen tijd, Kampen 1919, blz. 14). Bij

hem komt de leer van de Heilige Geest eerst tot haar volle recht.

以下は私見です。

ファン・ルーラーが「カルヴァンは三位一体神学の理想(ideaal)に最も近づいた」という言葉の中で最も言いたかったことは、まさにこのようなことだったのではないかと、思います。つまり、ファン・ルーラーもまた、ファン・ヘンデレンと同じように、カルヴァンの神学において、三つの神的位格の固有性、とくに聖霊のみわぎの固有性が正当に扱われている、というこの点において、まさに「三位一体神学の理想」を見ていたのではないのでしょうか。この点がまた、イミンク先生が教えてくださったとおり、あのヘンドリクス・ベルコフにさえあてはまるという、「オランダのカルヴァン主義は、カルヴァンの『キリスト教綱要』第三巻に焦点を合わせ続けてきた」というこの事情へと結びついてくるのではないのでしょうか。

わたしが、ファン・ルーラーが「カルヴァンこそが三位一体神学の理想に最も近づいた」と言っているのは、要するに教義学口キの問題である、と申し上げていることも、結局は、この点に関係があります。キリスト教綱要における聖霊論は「第3巻 聖霊論」として「第2巻 キリスト論」から相対的に独立している扱いを受けており、実質的な分量(ページ数)のことをいえば、聖霊論はキリスト論をはるかに凌駕しています。ファン・ルーラーがその必要性を語り続けた「相対的に独立した聖霊論」、そして「聖霊論的にも十分に展開された三位一体神学」の理想が、カルヴァンのキリスト教綱要の少なくとも「外観」においては、見事に実現されているわけです。

ファン・ルーラーが批判するバルト神学の重大な問題は、バルトにおいてキリストと聖霊の関係が「客観(objekt) - 主観(subjekt)図式」の中で説明されてしまうことにあります。つまり、「客観的に成就したキリストの贖いのみわぎが、主観的に人間の心に適用される」というあの説明です。もちろん、これはバルトだけの問題ではなく、言ってみれば広く西方教会の伝統というほどのものかもしれません。この件についてのファン・ルーラーの立場については、学位論文『律法の成就』(1947年)に詳論されているのですが、わたしはまだ正確な紹介ができません。しかし、わたしなりの言い方をさせていただけば、「客観 - 主観図式」で説明されたキリストと聖霊の関係は、いわばコインの表裏の関係と同じで、「同一事項の、裏面からの、単なる言い換え」に終わってしまうことになりかねないのです。しかし、もし聖霊にキリストのみわぎとは区別される固有のみわぎがあるのだとした

ら（事実、あるわけですが）、キリストと聖霊の関係は、「客観 - 主観図式」では到底説明しきれないものがあるはずなのです。

ファン・ヘンデレンとファン・ルーラーの関係について、詳しいことは知りません。二人の所属教派は違います。ファン・ヘンデレンの属するオランダキリスト改革派教会(CGKN)は、ファン・ルーラーの属したオランダ改革教会(NHK)から19世紀中に離脱して生まれた、同じ「改革派」の伝統を受け継ぐ別教派です。

しかし、ファン・ヘンデレンが教えていた神学大学の所在地アーペルドールンは、ファン・ルーラーの生まれ故郷でもあり、幼い頃から両親と共に通っていた出身教会（アーペルドールン改革教会）の所在地でもあります。そこは、オランダ王室（今でも改革派信仰を継承）のある「ロイヤルタウン」と呼ばれ、17世紀オランダの「第二次宗教改革」(Nadere Reformatie)の伝統を色濃く継承する地域です。G. C. ベルカウワーは、『予定論』の中で「第二次宗教改革」の意義を強調する現代の代表的神学者として、ファン・ルーラーとファン・ヘンデレンの名前を続けて紹介しています（英訳G. C. Berkouwer, Divine Election, Eerdmans, 1960, p.238参照）。

バルトの「キリスト一元主義」に対する批判においても、両者は全く一致しているように見えます。この論文においてファン・ヘンデレンは、ニーゼルのカルヴァン解釈を批判的に取り上げていますが、ご承知のとおりニーゼルは、基本的にバルト主義です。「バルト批判」という一点において「オランダ改革派」の保守的な人々が、かつて共闘していたし、今でも共闘し続けていることは、周知のとおりです。

しかも、じつは、今紹介しているファン・ヘンデレン論文が掲載されている『カルヴァンを見つめる視点』というこの本、わたしは例によってオランダの古書店から買いましたが、以前ご紹介したことがあるとおり、「ファン・ルーラー蔵書」(Ex Libris A. A. van Ruler)という実物を証明するシールが張られたものです！（なんだか自慢げな言い方ですね、お恥ずかしい）。ファン・ヘンデレンのW. H. フェレーマとの共著『改革派教義学概論』(Beknopte gereformeerde dogmatiek, Kok-Kampen, 1992)には、ファン・ルーラーからの好意的な引用がたくさんあります。

ついでに申せば、『カルヴァンを見つめる視点』と同じ「キリスト教の視点」(Christelijk perspectief)シリーズの中には、ファン・ルーラーの高校時代からの親友であり、アムステルダム自由大学の哲学教授になったS. U. ズイデマ教授(Prof. dr. S. U. Zuidema)の『カール・バルトとの対決』(Confrontatie met Karl Barth)という一書もあるようです。一種

の「アンチ・バルト叢書」なのかもしれません。

以上のことから見て、ファン・ヘンデレンとファン・ルーラーは、教派は違っていても、お互いの立場を知り合い、かつ深く理解し合っていた、と見てよいのではないのでしょうか。そして、ファン・ルーラーは、「バルト批判」という点においては、自分の所属する教派(NHK)の内側よりも、むしろ外側においてより多く仲間を見出していた可能性もあるのでは、という気がしました。以上、ご参考までに。

(2003年3月6日)